

# 命題要素のモダリティ化

## — 「さっさと」を例に—

陳 俊 宏\*

### 1. はじめに

日本語の文構造は、モダリティと命題に分けて考えることができるが、オノマトペは単なる客観的叙述内容、または補語の一種として用いられることがよく見られる。言い換えれば、オノマトペは命題要素として取り扱われることが多いと理解してよい。

ところが、次に挙げる例文(1)(2)はそれぞれ(1)(2)のように単なる命題要素ではなく、つまり、「そろそろ」や「さっさと」が単純に命題要素として働いているとは思えず、表現主体の主観的評価や感情的意味とも読み取れるように思われる。

(1) (予定の時間が迫ってくる)

そろそろ報道センターへと向かいます。<sup>1</sup>

(1) そろそろ報道センターへと向かおう (独り言の場面) / 向かいましょう。

(2) (チャイムが鳴った。先生が生徒に声をかけようとする)

さっさと席につく。 (作例)

(2) さっさと席につけ。

つまり、(1)と(2)から、オノマトペにはモダリティを表す用法もあるのではないかと示唆していると考えられる。本稿では、この点について探ってみたい。

なお、モダリティという概念は、従来の研究では文末の命題述部モダリティに求めてきた。モダリティの概念も概ねそれに基づいて、定義され

たものが多い<sup>2</sup>。ところが、文末以外に現れるモダリティ要素を認めるのも必要だという認識が高まっている。<sup>3</sup>

従って、本稿は「オノマトペが帯びているモダリティ性」に注目することを通して、文末以外のモダリティを観察しつつ、「オノマトペ」にモダリティを表す用法がいかに関与するのかについて説明を試みる。本稿では、説明の便宜上、「さっさと」というオノマトペの用例を中心に考察することを断わっておく。

### 2. 先行研究

まず、例文(2)「さっさと席につく」のモダリティ的な意味内容について見てみる。管見によれば、終止形に終わる命令形<sup>4</sup>の表現に関する先行研究は、主なものとして、尾上 (1979)<sup>5</sup>と仁田 (1999)が挙げられる。

尾上 (1979) は本論で取り扱おうとする「さっさと席につく」という文に秘められたモダリティ的な意味内容に類似する「そこにすわる」という文について、渡辺実の説<sup>6</sup>を引用し、命題要素の観点から、概して次のように述べた。

終止形に終わる命令形が可能であるという事実の根拠も、終止形の素材表示的な意味の姿に求めなければならない。何かを相手に求め得るようなあり方の言語の場において、実現を求めるその事態内容をただそのまま「そこにすわる」とことばにすると、聞き手の状況認識能力によって、それは聞き手自身に向

\* 台湾大学大学院院生

けられた要求の内容、あるいは聞き手がそこ  
で為すべき行為の指定内容となる。

言語の場を重視するという観点は文の分析研究  
に当たって示唆するところ大である。ただし、該  
当の「終止形に終わる命令形」に「命令形」とい  
うモダリティ要素が存することでもわかるよう  
に、この文においてモダリティ機能が大いに働い  
ていると見られるのである。ところが、この尾上  
(1979)の説明にはモダリティ観点からの論述で  
はなく、主に命題観点からの考察なのである。そ  
うすると、事態の素材的な表示形に潜んでいたモ  
ダリティがどのように働いているのかという疑問  
が残る。また、この論述は「事態の素材的な表示  
形」(命題)だけに止まり、本稿の考察対象であ  
る「さっさと席につく」を説明するには当てはま  
らないと思われる。

ところが、この言語場面を重視する見解は仁田  
氏に引き継がれる。従来、形式的な二元論の図式  
を絶対視し、すべての文要素を命題かモダリティ  
のいずれかに振り分けて捉えようという姿勢を  
とった仁田(1999)も自らその主張を以下のように  
修正した。

言語形式によって担われ、表示されるものの、  
モダリティは、個々の言語形式と、切り離す  
ことのできない不可分の関係にあるわけでは  
ない。モダリティの在りかは、文の意味構造  
にある。

さらに次のような見解を示した。

日本語のモダリティは、基本的に述語の形態  
変化によって表示される。ただ、モダリティ  
はテンスなどに比して、形態的カテゴリとし  
ての確立が低くかつ拡散的<sup>7</sup>である。

確かに、モダリティに関して確立の低さ・拡散  
性があるのに一理はあるが、しかし、なぜ例文  
(2)「さっさと席につく」は、ほかの叙法ではなく、  
命令の叙法と考えることができるのかについて説  
明を与えていないところがあると思われる。つま  
り、モダリティは言語形式の表面には現れていな

いものの、実は文の中のどこかに移動するのでは  
ないかと考えられる。

ところで、ここで特筆したいのは、両研究とも、  
モダリティ研究においては語用論の不可欠性を暗  
示していることである。

上述した論述の共通点を基盤とした先行研究に  
は、田村(1998)が挙げられる。

田村(1998)<sup>8</sup>は、このような「語用論的側面」  
を重んじる流れの中に、特に文末述語に付け加え  
る「ナケレバナラナイ」や「テモイイ」のモダリ  
ティ化について検討したものである。モダリティ  
が言語的に具現化される方法として、一つは、「た  
ぶん」や「よ」など専らモダリティを表す形式に  
よって表されるということであり、即ち、モダリ  
ティは意味レベルで保証されている。もう一つは、  
形式の語用的解釈に依存していることである。こ  
のような場合、文のモダリティは当該形式が場面的  
に背負っている意味、特に当該の心的態度が発  
話者によって発話時に示されるという語用的条件  
に依存しているのである。

この論述に賛同する部分が多いが、「ナケレバ  
ナラナイ」や「テモイイ」のモダリティ化、いわ  
ば、先行研究と同じく、文末述語のモダリティだ  
けに関心を持っているということで、即ち研究の  
対象範囲は本稿のと違う。

上述した先行研究からモダリティと語用論との  
繋がりを覗き知ることができる。本稿では、文末  
以外にある命題部分に持つモダリティ要素を研究  
対象とする。以下は「文の形式構造」だけでは  
なく、「言語活動の場」も考察の視野に入れつつ、  
語用論の観点からのアプローチを通して、用例に  
潜んでいるモダリティの実態を究明する。

### 3. 文レベルにおける「さっさと」の位置づけ

田村(1998)では、モダリティ化について以  
下のように述べている。モダリティ化とは命題要  
素であったものが、何らかの要因により、モダ

リティ要素へと変容していく過程のことを指す。従って、モダリティ化の発生・過程を論じる前に、その前提として、まず考察対象を命題要素として認めることができるのかを検証することが必要になってくる。

命題要素を認定するに当たって、ここでは田村（1998）の検証法を用いることにする。田村（1998）は文の要素にはモダリティ性格が含まれなければ、命題の要素と認められるという。本稿でも、文の要素に対してモダリティ性格を含むかどうかを検討することによって、命題要素を検証するのである。

モダリティ要素は、テンスに縛られず、否定などの対象にもならず、また、「～こと」等の連体修飾節内にも出現しないと指摘されている。以下本稿では、モダリティ要素の認定に関して、この三つの観点から検証したい。<sup>9</sup>

### ① 命題のテンスからの独立性

モダリティは表現主体の発話時における判断、発話・伝達態度を表わす部分である。例えば、

- (3) さいわい同公園一帯は戦火を逃れることができた。(読売新聞 1987.09.13)<sup>10</sup>

つまり、モダリティを表す要素は、例文(3)の「さいわい」のように、命題のテンスの指示する過去時点に縛られず、その心的態度が発話時においてのみ有効であるという特徴が指摘されている。

ところが、例文(4)(5)における「さっさと」は発話時現在においてのみ有効であるわけではない。

- (4) 韓国は、欧州連合（EU）との自由貿易協定（FTA）をさっさとやった。(読売新聞 2010.06.03)

- (5) 娘が生まれた日、主人は「仕事に差し支える」と、さっさと別室で寝てしまいました。(読売新聞 2010.04.14)

(4)(5)で使われる「さっさと」も発話時以前に、「自由貿易協定をやる」や「別室で寝てしまう」の補語として、その様態を述べるものである。つまり、

この「さっさと」は命題の指示する時点に依存し、その解釈もテンスに左右されることを示している。ゆえに、(4)(5)にある「さっさと」は命題要素だと言えよう。

### ② 否定の対象にならず

モダリティを否定するというのは、まさしく発話時の瞬間における心的態度を否定することであるため、モダリティ形式が否定の作用領域には現れず、まして否定の対象にはならないことが指摘されている。例えば、例文(6)の「～ようだ」は否定の作用領域に含まれていないのである。

- (6) 投票率が過去最低を記録したのも、悪天候のせいだけではないようだ。(読売新聞 2010.11.02)

ところが、例文(7)では、否定されているのは、「ハイと言う」の部分だけではなく、「さっさと」まで否定されている。つまり、否定の対象になることが、この文における「さっさと」が命題要素を示している根拠なのである。

- (7) アフガニスタンについて兵隊を送れと言われたら困るなどか、あるいは、逆にインド洋での給油にハイとさっさと言わないと日米関係が壊れるなどか、そんなことばかり気にしている。<sup>11</sup>

### ③ 連体修飾節との共起

益岡（1999）では、「～こと」という連体修飾節が客観性の高い表現であるため、主観性の表現であるモダリティ形式が「～こと」の内部に現れないことが指摘されている。例えば、例文(8)において、判断保留を表す「だろう」のような表現が、「～こと」のような客観性の高い表現の内部要素として用いられることは出来ない。

- (8)\*何も要らないだろうことを知らなかった。<sup>12</sup>

では、「さっさと」はどのような様相を呈しているのか。

例文(9)における「さっさと」はいうまでもなく、

連体修飾節内に生起して、命題成分の特徴を示している。

(9) さっさと親離れた娘、子離れのできない親。(読売新聞 2006.05.14)

上述した①、②、③の方法を通して、「さっさと」は補語として、述語の意味、性質に対して、事実をくわしく述べるだけで、それがなくても不完全とは感じないものが多い。つまり、「さっさと」は命題要素であることが明らかである。

また、次の用例(10)が更に理解しやすいと思われる。

(10) 「子供に『さっさと食べなさい』と言うことは禁物。『よくかんで食べなさい』と言ってほしい」と訴えた。(読売新聞 2005.09.11)

後ろに来る「よくかんで」と対比して、「さっさと」は様態描写機能を果たすという命題要素の特徴が確実に見受けられる。

ところが、命題要素である「さっさと」は果たして、いつも単純な命題要素として働いているのだろうか。

オノマトペは補充的な成分でありながら、表現主体の主観的評価や感情的意味が付きまともっていることも周知のことであり、言わば、ほかの命題要素と比べ、「オノマトペ」の情緒性は格別に目立つと思われる。

新聞では、次のような例文(11)が見られる。

(11) 「さっさと布団をたたまんか!」。23日午前10時過ぎ、福岡市九電記念体育館(中央区)に、久島謹吾さん(54)のかなり声が響いた。(中略)声を合図に、島民は乱雑にフロアに並んだ約350組の毛布を一斉にたたんだ。さらに、縦横に通路を設け、12の区画に仕上げた。あっという間に、団結が求められる“区画整理”を成し遂げた。(読売新聞 2005.03.24)

ところで、例(11)の「さっさと」は単なる命題要素なのであろうか。よく考えてみると、島民

が要求されたように、布団を畳み始めたことから、例文(11)の「さっさと」に聞き手の行為を要求する、即ち命令の意味が読み取られるように思われる。そして、例(10)を振り返ると、その文における「さっさと」にも、若干こういった聞き手にある行為を求めようとするモダリティ性があると言えよう。

ここで、問題点を次のようにまとめられよう。

確かにオノマトペは命題要素として働いている用例が多いが、上に挙げた「さっさと」という例の如く、意味用法の解釈によって、オノマトペは命題要素であったり、モダリティ要素であったりすることも見受けられる。なお、同じ「さっさと」というオノマトペ、なぜこのような相違なる様相を見せているのか。これは実に興味深い問題である。

また、なぜ「さっさと席につく」、「さっさと布団をたたまんか」が形式的には無標形式(終止形)や問いかけでありながら、意味・伝達機能は命令を表しているようになると考えられるのであろうか。それは「さっさと」の意味用法との間にいかなる繋がりがあるのかも明らかにしたいと思う。

#### 4. 命題要素のモダリティ化

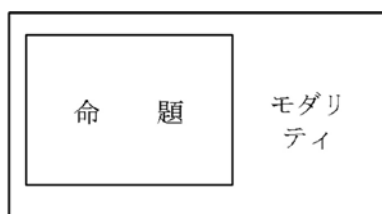
前節で論じたように、例文(11)「さっさと布団をたたまんか!」といった例の如く、オノマトペの形式は必ずしも常に客観的な事柄(命題要素)を表すわけではなく、モダリティ的な含みもあるように思われる。このことから、オノマトペにもモダリティを帯びているのではないかと考えられる。

それから、例文(11)のような場合、もし「さっさと」といったオノマトペにもモダリティを帯びていると考えるとすれば、文面にほぼ命題要素だけで成り立つ(2)の「さっさと席につく」という文は、いかなるプロセスを経て、「さっさと席につく」といった含みがあるように変容してしまうのか、という問題について考察したい。

なお、「さっさと」といったオノマトベの意味用法を明らかにするには、意味構造の理論と語用論を兼ねたアプローチが有効的であろうと考えられる。従って、本稿では、意味構造の理論を基盤とし、語用論の観点なども分析の視野に入れつつ考察を進め、上述の問題点について説明していきたい。

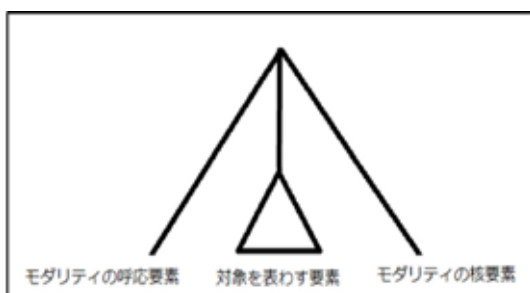
#### 4.1. 形式上の意味構造論

日本語学の伝統では文構造に関して次のような構造が想定されることが多い。<sup>13</sup>



図(1)

益岡 (1991) によると、モダリティの部分には、さらにその主要素の地位を占める核要素と、主要素と呼応する性格の呼応要素の2種類に区別することができる。図式にすると、図(2)のようになる。



図(2)

※図(2) 益岡 (1991: 42)

前に取り上げた例文のほかに、(12)(13)の如く、「さっさと」は有標モダリティ形式で命令を表す「しろ」「なさい」や依頼を表現する「てください」など、聞き手の行為を要求するものとの共起が多く見られる。

(12) 周りからも「バンドなんてやめて、さっさ

と働け」と言われるなど、つらい日が続いた。  
(読売新聞 2006.02.21)

(13) 10歳の娘に「さっさと学校に行きなさい」と言うと、「なんでそんな言い方するの」とけんかになりました。(読売新聞 2005.04.07)

ところで、呼応関係にある前の呼応要素と後ろのモダリティ要素はそれぞれのモダリティ性が異なると考えられる場合がある。例えば、上述した(12)(13)に現れている「さっさと」には命令や依頼のモダリティを仄めかしていると思われるが、その「さっさと」を「しろ」「なさい」や「てください」と比べると、命令叙法の意味合いが若干薄いことを指摘したい。

しかし、「さっさと」というオノマトベは常に命令・依頼系といったモダリティの有標形式と共起するとは限らない。

(14) それよりさっさとやる。(クレヨンしんちゃん50巻)

この無標形式の例文(14)は、なぜ命令文と同じ意味合いを持つことになるのか、論究する必要があると思われる。

ここで、再び仁田 (1999) が提案した「モダリティは形態的カテゴリとしての確立の低さ・拡散性」が想起させられた。

要するに、形式と意味が1対1の関係ではなく、いくつか異なる形式をもっている、意味的には同じモダリティを表現することもあり得るのである。

#### 4.2. 状況・場面との連関

以上の考察から、文末述語に有標のモダリティ形式のつく文がモダリティ性を有することは言うを待たない。モダリティ形式がつかない無標形式の文にも、モダリティの意味合いが読み取れることがわかった。ただし、意味的にはほぼ同じでありながら、モダリティ形式のあるなしによって違いがあると考えられるが、その違いをわきまえる

必要があるように思われる。

野林 (2001) では、言語形式を形態的に観察・分析するだけでは、言語表現主体がなぜそのような表現を行ったのかという理由づけは必ずしも十分にはできない。その使用の事情や条件を完全に把握するためには、言語形式の背後にある「状況・場面との連関」といったレベルにまで考察の手を広げる必要があると述べている。そこで、この節では、語用論の立場からこの相違点を究明する。

(15)

タイトル：

けがの妻を「さっさと運べ」救急隊員殴った疑いで逮捕

記事全文：

交通事故で出勤中の救急隊員を殴ったとして四日市南署は25日、四日市市大井手3丁目、建設作業員清水武彦容疑者(40)を公務執行妨害と傷害の疑いで逮捕し、発表した。「酔っていて覚えていない」と容疑を否認しているという。

同署によると、清水容疑者は7月22日午後8時40分ごろ、同市久保田1丁目の市道で四日市市消防本部の救急隊員男性(38)の顔を殴り、職務を妨害したうえ、10日間のけがを負わせた疑いがある。10分ほど前に同容疑者の妻が運転する軽乗用車が、別の車と接触して横転。駆けつけた救急隊員が妻のけがの具合を調べていたところ、清水容疑者が「さっさと運ばんか」と怒鳴り、殴ったという。現場は市立四日市病院の前だった。(朝日新聞 2010.08.26)<sup>14</sup>

この新聞記事においては、「さっさと運ばんか」という表現が用いられ、つまり形式的には問いかけで書き込まれているにもかかわらず、タイトル付けをした際に、意識的に「さっさと運べ」という命令形の叙法を取り上げたということになる。この現象はまさに「さっさと運ばんか」という表現に命令形の叙法が潜んでいることの現れであろう。

要するに、例文(15)において、容疑者が「さっさと運ばんか」と怒鳴って、救急隊員を殴ろうとした場面において、「さっさと運ばんか」という形式上の問いかけ文を命令文として捉えられることができよう。ところが、その命令叙法の意味機能は一体何によって担われているのかという問題が究明されるべきであろう。

本来なら、その表現の成立の証を主として文末のある活用形や終助詞類の存在に求めるという手法がとられるべきであろう。ところが、例文(15)の場面において、本来、命令叙法「運べ」という表現が要求されてくるはずなのに、形式的には問いかけ文「運ばんか」が用いられたのである。すると両者の間に不釣り合いが生じたわけである。

一般的には、文末が無標形式や別の叙法形式となると、文の表層レベルにおいては、モダリティ要素が見当たらなくなる。即ち、言語形式と言語活動の場面との間に釣り合いの取れないことが生じる。そして、このアンバランスを軽減するために、その表現の成立は、呼応要素の位置にある、しかもモダリティの性格と近似した<sup>15</sup>「オノマトペ」、つまり例文(15)の場合、「さっさと」に求められるようになると考えられよう。

「さっさと運べ」と「さっさと運ばんか」を比較すると、形式上において相違なる様相が見られ、そして、その相違はモダリティのあり方にも反映されていると思われる。後者の場合には無標叙法が用いられることによって、文におけるモダリティが「オノマトペ」に集中し、そこにモダリティ(命令叙法)が大いに働くという結果になると考えられる。

結論を先に言うと、文末モダリティ形式の有無により、文全体のモダリティ的意味機能の担い手が変わっていく。

(16) 「ギャーッ、だ、だれか、きてッ！」長者の娘は、鼻をおさえたまま、気を失ってその場へ倒れこんでしもうた。「早(はよ)う医者を呼べ、しゃんしゃん<sup>16</sup>(さっさと)呼ば

んか」(読売新聞 2005.11.06)

例文(16)における「早(はよ)う医者を呼べ」は有標モダリティ形式を使い、モダリティ的意味機能の主な担い手は命令表現の「呼べ」にある。ところが、「呼ばんか」のように、不相応な形式になると、そのモダリティ機能の担い手の役割は「さっさと」に転向して「さっさと」によって果たされるようになる。言わば、「さっさと」が主なモダリティ的意味機能を持つようになる。モダリティ化が起こることにより、全体的なバランスがとれるようになり、モダリティ用法が生み出されるのである。このような径路をたどって、不釣り合いも軽減し、無標形式の文もモダリティ性を帯びる文と解釈されることになり、文全体がモダリティ性を保つことができるのである。

さらに言うと、「さっさと」の有無によって、命令叙法の度合いにも変わってくる。

(17) 我が家では毎朝、おかんの怒号が家中に響き渡っていた。

「ひろ!! 時間やで!! はよ起きんかい!!」  
弟はひろまさという名前だ。またこの頃、おかんはよく私と弟の名前を取り違える事があった。

「けん!!、、、ひろ!! 起きんかい!!」

あたたかな布団の中、朝の最後の30分をまどろんでいた私は毎朝のようにそんな声で目覚めさせられていた。

そしてそんな時、私は部屋から出て逆におかんに怒鳴った。

「名前間違えんな言うとするやろ!!」

「ガキ!! お前もさっさと起きんかい!!」

そしてこの頃、丁度反抗期だった弟も黙ってはいなかった。

「起きてるって言うてんだろ!!」

しっかり布団にくるまりながら怒鳴っていた。<sup>17</sup>

例(17)の後半にくと、作者の弟がまだ起きていないので、命令叙法の度合いがますます大きくな

ると考えられる。このような文脈に応じて、「起きんかい」に潜在的な命令叙法を引き立てようとする意図が生まれる。「起きんかい」の前に「さっさと」が付加される理由はそこにある。言い換えれば、「さっさと」は「起きんかい」に潜んでいた命令叙法の担い手になり、モダリティ性を引き立てる機能があるからだと思われる。

以上の考察から、「さっさと」は命題要素だけではなく、モダリティ的な意味機能を担うこともできることがわかった。また、「起きんかい」といった問いかけの文も、「さっさと」と共起すると、文全体までモダリティ化が起こり、命令叙法の度合いがより顕著になると考えられよう。

## 5. おわりに

以上、「オノマトペ」のモダリティ化について少しばかり考察してきた。その結果をまとめると、次のような結論が挙げられる。

無標形式の文においては、言語形式と場面との不釣り合いを軽減するために、モダリティが命題要素の中で主観性が強いと思われる、呼応要素の位置にあるオノマトペのほうに移動するように考えられよう。つまり、オノマトペにモダリティ化が起こるわけである。それにより、文全体は元来のモダリティ性を保つことができる。従って、場合によって、オノマトペがモダリティ要素として扱われる用法も見受けられると言えよう。

そこで、ほぼ素材表示(命題要素)しか持っていない文が、呼応要素のオノマトペとの共起により、その文に潜んでいるモダリティ性が引き立てられるようになり、そして、文全体はモダリティ化が起こる。表現主体が伝えようとする主観的評価や感情的意味(モダリティ要素)もいっそう明らかになる。

今後はこのような論述を踏まえて、文末以外の命題要素のモダリティ化の実態を幅広く考察を進めていき、そして、そのモダリティ化に影響を与

える要因などについても究明したい。

注

- 1 例(1)は、フジテレビの大島由香里アナの公式ブログ(2009年12月31日)からとった例文である。
- 2 益岡(1991)、仁田(1999)。
- 3 森本(1994)、益岡(2001)。
- 4 「終止形に終わる命令形」は尾上(1979)での用語である。
- 5 尾上(1979)が後に尾上氏自身の論文集である『文法と意味』(2001)に収録されている。
- 6 尾上(2001:104-5):渡辺氏は終止形について、「生活費があがる、それが問題だ。」のような独立素をつくることに注目して、「用言の活用形の中で、素材表示的とも呼ぶべき用法を持つのはこの独立形(=終止形)だけ」「その意味で(中略)体言の素材性に等しい性質を有するもの」と把握している。例えば、遊び疲れて帰ってきた子供が「お茶!」と叫ぶ。
- 7 例えば、本論で扱う終止形の述語にもかかわらず、文の帯びるモダリティの意味は、命令文に転化してしまうといったようなことが、モダリティの「確立の低さ・拡散性」だと考えられる。
- 8 田村(1998:12)
- 9 田村(1998)では、先行研究を整理して、モダリティ要素はテンス・アスペクトから自由であり、否定、疑問等の対象とならず、時・条件の副詞節内や「～こと」等の連体修飾節内に出現しないこと、などいくつかのモダリティ要素の特徴あるいは、認定基準をまとめてくれる。本稿では一つずつの基準で検証せず、あえてそのうちわりと一般性が高い三つの基準をしぼって、検証することにする。
- 10 本稿における出所に読売新聞と書いてある語例はすべて読売新聞のデータベースであるヨミダス文書館からの語例である。
- 11 東大・朝日シンポ「21世紀、日本文明の可能性」(<http://www.asahi.com/shimbun/sympo/081122/speech04.html>)からの引用例である。
- 12 益岡(1991:35)
- 13 ここでは、説明の便宜上で、命題の部分を省略して、話を進めたいと思う。
- 14 朝日新聞、マイタウン:三重。<http://mytown.asahi.com/areanews/mie/NGY201008250015.html>
- 15 なぜなら、モダリティの定義は研究者によって少々異なりがあるが、命題についての話者の発話時の心的態度を表す判断や伝達の態度といったものという認識が共通している。他に、この主観性という概念と並行して述べられることが多いのが

「オノマトペ」からである。

- 16 「しゃんしゃん」は讃岐弁で、「さっさと」と同じ意味を示している。
- 17 <http://www2.airnet.ne.jp/~kenshi/jitsu15.html>

参考文献(五十音順)

- 尾上圭介(1979)『『そこにすわる!』—表現の構造と文法—』『言語』八巻五号大修館書店
- 田村直子(1998)「命題要素のモダリティ化について—ナケレバナラナイやテモイイ等を例に—」『筑波応用言語学研究』(5), 1-14
- 仁田義雄(1999)「モダリティを求めて」『言語』二十八巻六号 大修館書店
- 野林靖彦(2001)「モダリティ形式と副詞の共起・呼応現象の記述—paradigmとsyntagmの相関」『国語学研究』(40), 103-91, 東北大学文学部国語学研究刊行会
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志(1999)「命題との境界を求めて」『言語』二十八巻六号 大修館書店
- 益岡隆志(2001)「モダリティ」『現代日本語必携』学灯社
- 森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版